吹田市立博物館
SUITA CITY MUSEUM
博物館だより
NO.77
Suihaku
2019.3

平成31年度（2019年度）春季特別展

音楽家 貴志康一（きし） 生誕110年
～吹田に生まれた若き天才～

会期：平成31年（2019年）4月27日（土）～6月9日（日）

ヴァイオリンを奏でる貴志康一（撮影：中山岩太）と掲載誌（『音楽雑誌ムジカ』12月号、1931年刊行）の表紙

平成31年（2019年）は、吹田で生まれた稀代（きだい）の音楽家・貴志（きし）康一の生誕110年です。16歳の時に大阪でヴァイオリニストとしてデビューし、またスイス、ドイツへ留学後に、作曲家としての才能を開花させた貴志は、《仏陀》《日本組曲》《竹取物語》など、精力的に作曲活動を展開したほか、ベルリン滞在時には指揮者としても活躍、貴志自身がベルリン・フィルハーモニー管弦楽団を指揮し、自作の作品を録音するなどしました。帰国後も指揮者などとして活躍しますが、ほどなくして病に倒れ、28歳で亡くなりました。

本展覧会では、日本のクラシック音楽の草分け的存在として活躍した貴志の足跡をたどることで、近年再評価されつつある貴志が日本のクラシック界に残した功績を見つめ直します。

（当館学芸員　五月女賢司）

人間 貴志康一と音楽家 貴志康一の誕生、そして晩年

図1. 渡欧に際して　貴志康一（右端）と家族（1926年晩夏）
学校法人甲南学園貴志康一記念室 所蔵資料

人間 貴志康一の誕生

貴志康一は、明治42年（1909年）3月に母カメの実家であり代々上皇や伊勢神宮に献上米を納めてきた吹田の豪農西尾家で、貴志家二男六女の長男として誕生の後、大阪市北区東野田町（現在の都島区桜宮）で9歳まで育った。大正7年（1918年）秋には一家で芦屋浜に転居し、母の手びきでヴァイオリンを学び始める。大正8年（1919年）には、母の恩師大橋純二郎が週に一度自宅に招かれ、貴志はヴァイオリンを、妹はピアノを、また家族でコーラスを学んだ。

あまり知られていないが、貴志はこのように、父貴志奈良二郎（後の彌右衛門）が、その父の創業した繊維問屋を手広く営む商人である一方で、東京帝国大学哲学科を卒業した文化人であり趣味に興じた数寄者であったことによる文化・芸術上の影響だけでなく、母カメの教育上の影響を多分に受けて育ち、後にその音楽的才能を開花させることになる。

音楽家 貴志康一の誕生

大正14年（1925年）に16歳で「貴志康一ヴァイオリン演奏会」を開催し、大阪楽壇にデビューすると、JOBKオーケストラ第一ヴァイオリンに加わるなど、活躍をし始めた貴志に早速、洋行の誘いが入る。大正15年（1926年）に、ロレックス時計の日本代理店長ワルター・シュルツがスイス留学を勧めたのである。ほどなくして留学を決意した貴志は、甲南高等学校高等科文科乙類を退学。同年12月、神戸港から出航し、翌年からスイスのジュネーヴ国立音楽院ヴァイオリン科中等クラス3年生に編入した。17歳のことであった。この後、3次にわたる留学で計約6年半をスイスとドイツで過ごし、ヴァイオリンのほか作曲や指揮など、音楽の研鑽を積むことになる。

ジュネーヴ国立音楽院で学年1位のプルミエ・プリを受賞するなど成長をした貴志は、昭和3年（1928年）10月からはドイツのベルリン国立高等音楽院でヴァイオリンと音楽理論を学ぶ。ドイツやフランスの演奏会で演奏したほか、昭和4年（1929年）8月には20歳で、1710年製のヴァイオリン・ストラディヴァリウス「キング・ジョージIII」を購入し（昭和8年（1933年）頃まで所有）、同年9月にシベリア鉄道と天草丸で帰国。日本人がストラディヴァリウスを所有した前例はなかったので、貴志がストラディヴァリウスを携えて帰国したことは当時、新聞などでも報道され、話題となった。

この一時帰国に際し貴志は本格的な演奏活動を開始した。その後、昭和5年（1930年）に21歳でベルリンに戻り、研鑽を積み翌年夏に再帰国。日本で演奏活動の後、昭和7年（1932年）秋、23歳の時に3度目の渡欧をする。そして、昭和10年（1935年）春、26歳の時に完全帰国をするのである。

なお、帰国前の昭和9年（1934年）11月には、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団「日曜コンサート」を指揮している。

図2. 1710年製のストラディヴァリウス「キング・ジョージIII」写真
学校法人甲南学園貴志康一記念室 所蔵資料

GROSSE KONZERT bei KOICHI KISHI

mit den Neues Symphonie Orchester

貴志康一歸朝演奏會

指揮 貴志康一

管絃樂 新交響樂團

11月26日(火)午後7時30分

於 日本青年館ホール

図3. 貴志康一指揮 帰朝演奏会プログラム（1935年11月26日）

晩年の貴志康一

昭和10年（1935年）5月の完全帰国後、貴志は新進の指揮者として大阪・東京で活動を開始した。同年11月26日（図3）から約6ヵ月の間に、3回の《第九》演奏会を含めて9回も新交響楽団（現在のNHK交響楽団）を指揮して注目を浴び、山田耕筰、近衛秀麿に続く新しい世代の音楽家として嘱目された。

特に昭和11年（1936年）2月19日、この新交響楽団のベートーヴェン《第九》演奏会で、合奏・重奏におけるすべてのパートがまとめて書かれている楽譜である「スコア」を見ることなく交響曲を指揮して注目される。

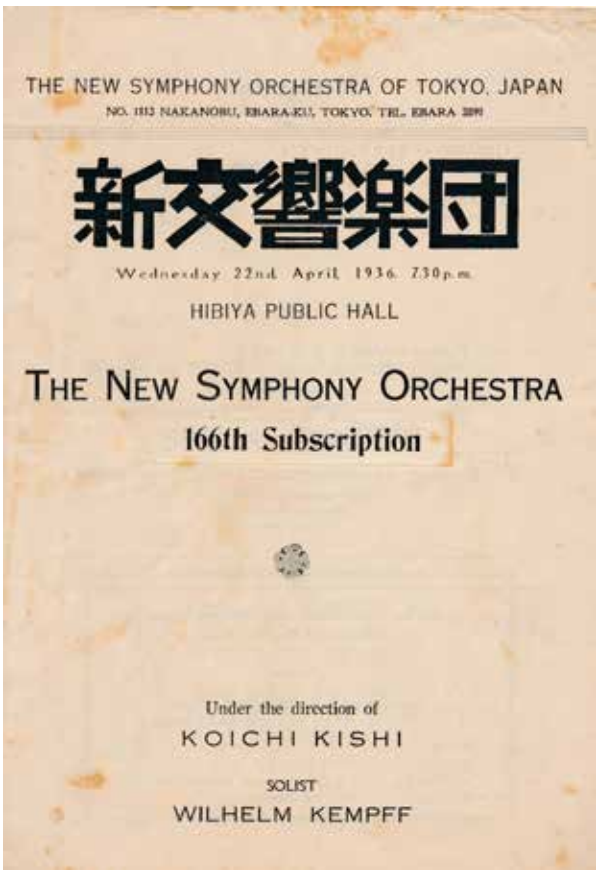
図3～5の演奏会プログラムはこの頃のもので、日本で目覚ましい活躍が始まった直後であり、また迫りくる病の直前でもあった。

図3のプログラムは昭和10年（1935年）11月26日に日本青年館ホールで開催された貴志の指揮による帰朝演奏会の際のものである。同年5月に帰国後、貴志がベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の日本招へいを計画したり、「ドイツ音楽界の現状」と題した講演をしたりと、活躍を始めた頃に開催された。

図4のプログラムは昭和11年（1936年）4月22日に日比谷公会堂で開催された新交響楽団の第166回定期公演の際のもので、ナチスの音楽使節として来日したピアニスト、ヴィルヘルム・ケンプが出演し、貴志が指揮した。

図5のプログラムは昭和11年（1936年）5月12日に日比谷公会堂で開催された貴志の指揮による新交響楽団のケンプ告別ピアノ演奏会の際のものある。帰国するケンプを送別する目的で開催された。

この後、同年5月28日にベルリンオリンピック蹴球選手壮行会として《第九》を指揮した直後の6月12日、27歳の貴志は病に倒れる。同年10月に妹の照子、11月に父の彌右衛門が病で急死。父の葬儀を取り仕切った後貴志は、大阪大学病院に入院。まもなく退院し芦屋で療養生活に入るが、翌12年（1937年）11月17日、心臓麻痺で死去。享年28歳の若さだった。


THE NEW SYMPHONY ORCHESTRA OF TOKYO, JAPAN
NO. 1812 NAKANOBU, EBARA-KU, TOKYO, TEL. EBARA 2899

新交響楽団

Wednesday 22nd April 1936 7.30 p.m.

HIBIYA PUBLIC HALL

THE NEW SYMPHONY ORCHESTRA

166th Subscription

Under the direction of

KOICHI KISHI

SOLIST

WILHELM KEMPFF

図4. 貴志康一指揮 新交響楽団第166回定期公演プログラム（1936年4月22日）

GROSSER KONZERTABEND.

NEUES SYMPHONIE ORCHESTER.

Dirigent : Koichi Kishi.

Solist: Wilhelm Kempff. Klavier.

Am Dienstag, den 12ten Mai 1936 um 7 Uhr abends

im Hibiya Kokaido.

ヴイルヘルム・ケンプ

告別ピアノ演奏會

曲目と解説

日本ポリドール蓄音器株式會社

図5. 貴志康一指揮 ヴィルヘルム・ケンプ 告別ピアノ演奏会プログラム（1936年5月12日）

図6. Telefunken:《日本スケッチ》より「市場」（1936年7月発売）

作曲家としても活躍した貴志は、昭和8年（1933年）にヴァイオリン曲《月》《水夫の歌》《竹取物語》《漁師の唄》《瀧》、昭和9年（1934年）に大管弦楽のための《日本スケッチ》（全4曲：市場、夜曲、面、祭）など多くの作品を残した。

このうち《竹取物語》は、理論物理学者の湯川秀樹が昭和24年（1949年）にノーベル物理学賞を受賞した際、授賞式後の晩さん会で演奏された。貴志が没して12年の歳月が流れていたが、ヨーロッパの人々はドイツなどで活躍した貴志のことを覚えており、彼の曲を演奏曲目に選んだのである。

現在、学校法人甲南学園貴志康一記念室が所蔵する資料群が様々な研究者によって紐解かれることで、貴志の業績が明らかにされ、また多くの演奏会も開催されるようになり、ヴァイオリニスト、指揮者、作曲家など多彩な音楽家として、注目を集めるようになっている。

参考文献

・梶野絵奈、長木誠司、ヘルマン・ゴチェフスキ（2011）『貴志康一と音楽の近代――ベルリン・フィルを指揮した日本人』青弓社
・毛利眞人（2006）『貴志康一――永遠の青年音楽家』国書刊行会
・『KISHI KOICHI　貴志康一　1909-1937』甲南学園貴志康一記念室

（当館学芸員　五月女賢司）

平成31年度企画展　西村公朝流　仏像のつくりかた

会期：平成31年（2019年）6月15日（土）～7月7日（日）

木仏（立体彫り）の《お地蔵さん》（1999年頃）

当館では、吹田にゆかりある西村公朝（1915～2003）に関する展覧会を定期的に開催しています。今回の企画展では、当館が収蔵する西村公朝の仏像を、「つくり方」に着目して紹介します。

西村公朝は大正4年（1915年）に生まれ、東京美術学校彫刻科を卒業後、美術院の仏像修理技術者として約1,300体もの国宝・重要文化財の仏像修理に携わった人物です。「仏像修理の第一人者」とも称されます。37歳のときに得度して僧侶となり、愛宕念仏寺の住職を拝命しました。吹田に住まい、当館の建設に伴う市内の文化財（仏像）調査委員に参加後、初代館長に就任しました。また、仏像彫刻家として全国各地の寺院などから依頼を受け、慈悲あふれる仏の姿を生涯にわたって追求し続けました。

一方、晩年、西村は高度な技術や経験を問わない“手軽な”仏像制作の手順を、メディアや書籍等で積極的に伝え、「心をこめてつくればどれも仏」という言葉を残しています。昭和60年（1985年）の『やさしい仏像の作り方』、平成11年（1999年）にはテレビ番組のテキスト『NHK趣味悠々 西村公朝のほとけの造形』などを出版しています。これらは、つくり方の手順を知ることができるだけでなく、西村の仏像制作に対する姿勢や想いを感じられる点でも大変興味深い文献と言えます。

例えば、「手もみ仏」のつくり方では、両手で包むようにして粘土をたたいたあと、それを紙の上に立たせ、紙を回して顔の場所を決めます。手直しはせず、偶然できた土の形から仏の姿を見出します。さらに口をつくるときは「仏さんが呼吸できるように」「肺まで届くように」ヘラを深く差し込みます。西村の言葉には、自然や身の回りのあらゆるものに命を感じて、仏を見出すあたたかい眼差しが感じられます。

左：土仏（手もみ仏）の《お地蔵さん》
右：石仏の《お地蔵さん》（1999年頃）

出版物に掲載された作品の多くは、現在当館の収蔵品となっています。本展では、それらを土・石・木といった材質別に展示いたします。それぞれのつくり方の手順とあわせて西村の言葉も紹介し、仏像づくりを通して私たちに伝えようとした西村の想いにも触れていただくことができるでしょう。さらに、展示の一部では、一般的な仏像のつくり方を紹介する予定です。仏像鑑賞の入門としてもお楽しみいただき、西村作品のみならず、仏像に親しむ機会となれば幸いです。

（当館学芸員　河島明子）

同時開催　「さわる月間」

当館では毎年、企画展と同時期に「さわる月間」を開催しています。「さわる月間」は、触れて体験できる資料を充実させるための取り組みです。「ふれ愛観音」、「バスオール」、「力石」などは、この「さわる展示」での実験を経て平成28年度からロビーに常設していますが、この期間だけの展示資料もあります。企画展に関連して、仏像の着付け体験や木材サンプルに触れられるコーナーを設ける予定です。関連イベントも充実しています。「さわる」や「体験」がいっぱいのこの時期に、ご家族などでぜひご来場ください。

（当館学芸員　河島明子）

館長インタビュー⑬

MIHO MUSEUM 館長

熊倉功夫さん

聞き手：中牧弘允

平成31年（2019年）1月23日、茶道史研究者の熊倉功夫さんに貴志康一との関わりについてお話をうかがいました。

熊倉功夫（くまくら いさお）
東京教育大学文学部日本史学科卒業。文学博士。筑波大学教授、国立民族学博物館教授、林原美術館館長、静岡文化芸術大学長などを経て、平成28年（2016年）よりMIHO MUSEUM館長。茶道史、日本の料理文化史、民芸運動などを幅広く研究。

中牧：このたびの春季特別展では貴志康一を取り上げます。

熊倉：そもそも私は貴志康一という人物をあまり知りませんでした。きっかけは茶道史です。近代の茶道史をむかし研究しておりまして、文献を調べていました。

中牧：研究自体のきっかけはなんですか。

熊倉：茶の湯研究は千利休の研究が60％を占めます。古田織部、小堀遠州、三千家（表千家・裏千家・武者小路千家）、その元の千宗左あたりの研究がそれに加わって90％。さらにさかのぼって珠光（しゅこう）とか紹鷗（じょうおう）が5％くらい。江戸時代にくだって松平不昧（ふまい）という大名が3％です。つまり茶の湯研究というのは明治維新までで全部終わってしまうわけです。茶道史の文献を読むと、幕末の井伊直弼（なおすけ）で終わるか、せいぜいあって岡倉天心に何行か触れる程度で終わっています。けれども、歴史でいちばん身近で肝心なのは近代ではありませんか。日本史の教科書も3分の1は近代に当てられています。それにもかかわらず近代の茶の湯研究はゼロでした。人がやっていないことをやるのが学問です。やっていない理由には2種類あって、意味がないか難しいかのどちらかです。

私が大学院3年生のときに先生から「近代のお茶について何か書け」と言われたことがありました。まだ誰もやっていなかったので、基礎資料を集めるために明治以来どのような本がお茶に関して書かれたのかを片っぱしから調べました。私も若かったからできたのでしょうね。国立国会図書や古本屋、古書目録などタイトルに「お茶」と付いているものはぜんぶ引っ張り出して見たり、見られないものはタイトルをメモしたりしました。それで『近代茶道研究史序説』という論文を書きました。

中牧：まさにパイオニアの仕事ですね。

熊倉：文献を分類すると、茶の湯研究はほんのわずかで、茶人が自己学習の成果として出版した“茶道の入門”や“茶の湯に想うこと”というようなエッセイがたくさんありました。誰も扱ってこなかったこれらの本のなかに面白いものが続々と出てきました。なかでも感動した雑誌が、たまたま古本屋で手にした『徳雲（とくうん）』でした。お茶の雑誌ですが分厚くて120ページもあり、内容もとても濃いものでした。雑誌には天沼俊一が仏教建築のすばらしい写真を連載していたり、京都大学の有名な先生がたがみんなして執筆していたんです。一体誰が作っているんだろうと調べたら貴志彌右衛門という人物が巻末に「教養としての茶道」という文章を書いていて、彌右衛門が独力で出しているということがわかりました。彌右衛門は貴志康一の父です。

『徳雲』は昭和4年（1929年）に刊行して昭和11年（1936年）に彌右衛門が亡くなって廃刊しています。雑誌は昭和初期のインテリの役割をもののみごとに表現していました。茶の湯が近代にどのようにインテリへ受け入れられていったかを典型的に表現しているということに気付いたのです。

中牧：当時のインテリというのは実業家ですね。インテリは文化の担い手でパトロン役を果たしていますね。

熊倉：そのとおりです。私は彌右衛門のことを『日本美術工芸』に紹介しました。『日本美術工芸』は阪急が発行していた雑誌です。阪急は小林一三が作った会社ですが、小林は数寄者で商売でも遊びを忘れない人です。彼のいくつかある遊びの一つが茶の湯と美術でした。ですから自分で作ったデパートの最上階に自分の遊び場を作りました。関西のつきあいのある骨董屋を集めるということをしたんです。そこで時々自分も買い物をしていました。

その骨董屋街をつくると同時に美術雑誌をつくりました。それが『阪急美術（汎急美術）』です。当時、日本の美術史の愛好者たちが楽しめる唯一の雑誌だったのではないでしょうか。それが展開して誕生した『日本美術工芸』という雑誌は若手研究者の登竜門でもありました。一般誌ですから面白そうな人を連載させてくれました。若い人に門戸が開かれていたのです。

私が書いた『近代茶道研究史序説』の編集をしてくれた人がたまたま『日本美術工芸』の編集者でして、彼から「連載しないか」と言われました。昭和44年（1969年）、私は26歳でした。

中牧：大阪万博の1年前ですね。

熊倉：毎月15枚書きました。これはいい訓練でした。24回、2年間連載しました。そのうちの1回で『徳雲』を取りあげて貴志彌右衛門のことを書きました。

彌右衛門は三高から東大に進学して甲南学園で教鞭を執っていましたが、理想とする教育ができず放棄します。貴志家は代々大金持ちですから、彌右衛門は教師を辞めて数寄者の生活に入ります。妙心寺の徳雲院に茶室を建てました。

彌右衛門が結婚して芦屋に構えた新居は阪神間モダニズムの権化みたいな家です。伝統的な文化にどっぷりつかっているようだけれども、一方で西洋的なモダンな生活にどっぷりつかっているという不思議な人たちです。一種のメルヘンのような家庭生活をしていて、家族で音楽会をしたり外国のお客さんを招いたりしています。

海岸を散歩していた亡命ロシア人が康一のバイオリンの音色を聴いて、貴志家を訪ねました。ロシア革命（1917年）の直後で日本にも住んでいたんですね。その人物がまだ少年だった康一を指導。やがて康一はヨーロッパに渡ります。彌右衛門はストラディバリウスのバイオリンを康一に買い与えて、はじめて日本に持ち込みました。康一はそのうちバイオリンから作曲に転じます。指揮法を勉強して美しい歌曲を作りました。日本人で最初にベルリン・フィルで指揮を執りましたが、昭和12年（1937年）に28歳で亡くなってしまいます。

中牧：彌右衛門は吹田の西尾家のお嬢さんと結婚しています。西尾家もモダンな造りで、武田五一の建築でもあります。

熊倉：そうですね。お里帰りでお産をしたので貴志康一は西尾家で誕生しています。

一方で、関東の明治から大正期の住宅は洋館と和館が別です。モダニズムには到達しません。

中牧：関東と関西で違うのですね。茶の湯の三千家とのつながりの違いは関東と関西でありますか。

熊倉：ありますよ。関西は家元と近くて影響が強いです。明治時代には煎茶が流行しました。

中牧：吹田の中西家には煎茶道具が残っています。売茶翁の書もあります。

熊倉：西尾家もそうですが、吹田の文化的環境は改めて注目に値しますね。

大阪で言えば住友財閥の青銅器も中国趣味の煎茶コレクションです。日清戦争以降は煎茶は衰退して抹茶になっていきました。関西では藪内流が多いです。貴志家も西尾家も藪内流、小林一三は表千家です。

関西の人は真面目に稽古をして、茶の湯とは何かを哲学として真剣に考えます。彌右衛門がまさにそうです。

中牧：茶の湯でつながる数寄者同士の交流があったのですね。いまの大阪のイメージとは少し違います。

中牧：熊倉さんは貴志康一の妹さんとの交流があったそうですね。

熊倉：はい。『日本美術工芸』の連載を読んでくれていた読者の1人が貴志康一の妹・山本あやさんでした。あやさんは貴志康一の顕彰のために、彌右衛門のことを書いた私に会いたいと手紙を下さいました。

あやさんにはお兄さんを何とかして世に出したいというお気持ちが強くあって、その結果、甲南大学のなかに貴志康一記念館ができたという経緯があります。楽曲を演奏する人たちも出てきました。ソプラノ歌手の豊田喜代美さんという沖縄県立芸術大学の教授もされていた方が、貴志康一の歌曲に魅入られてレコーディングやコンサートをしています。メイシアター（吹田市文化会館）でも開催しましたよ。どれも魅力的な楽曲です。

そうやって貴志康一はある程度は人に知られるようになりましたが、彌右衛門の方はまだなので、それについて私にやってほしいとあやさんから言われていました。

中牧：あやさんご自身も文化をむすびつける役割をなさっていたのですね。春季特別展の講演会では吹田をはじめ関西の文化人のパトロネージについても講演を期待しています。きょうはありがとうございました。

（2019年1月23日）

平成31年度（2019年度）春季特別展
「音楽家 貴志康一 生誕110年～吹田に生まれた若き天才～」関連イベント

オープニング・イベント ●申込不要 ●参加費無料

◆4月27日（土） 午後1時～1時50分（無料観覧日）
開会式・コンサート
貴志康一の生涯と音楽～歌曲で綴る名曲～
●出演／アンサンブル・ステッラ
歌：隈本由紀子氏 山崎芳智子氏
ピアノ：中村いく子氏 隈本義子氏
●会場／2階講座室 ●定員／先着120名

◆4月27日（土） 午後2時～2時30分（無料観覧日）
展示解説
●講師／五月女賢司（当館学芸員） ●会場／3階特別展示室

講演会 ●申込不要 ●参加費無料
●会場／2階講座室 ●定員／先着120名

◆4月27日（土） 午後2時45分～4時45分（無料観覧日）
貴志康一 28年の軌跡
●講師／毛利眞人氏（音楽評論家）

◆5月18日（土） 午後1時30分～3時30分（無料観覧日）
貴志康一とその父 彌右衛門
●講師／熊倉功夫氏（MIHO MUSEUM 館長）

映画上映会&映像解説 ●申込不要 ●参加費無料
●会場／2階講座室 ●定員／先着120名

◆4月28日（日）午後1時30分～2時30分
貴志康一監督作品
『鏡――日本人家庭の伝統』
（1933年制作、ウーファ制作、16分）
『春――日本の春祭り』
（1933年制作、貴志学術映画研究所制作、13分）
●講師／毛利眞人氏（音楽評論家）
※上映素材提供：国立映画アーカイブ

展示解説 ●申込不要 ●参加費無料 ●観覧料別
●会場／3階特別展示室

◆4月29日（月・祝） 午後2時～2時45分
●講師／中牧弘允（当館館長）

◆5月25日（土） 午後2時～2時45分
6月 8日（土） 午後2時～2時45分
●講師／五月女賢司（当館学芸員）

コンサート ●申込不要 ●参加費無料
●会場／2階講座室 ●定員／先着120名

◆5月5日（日・祝）、5月26日（日） 午後1時30分～2時15分
貴志康一の生涯と音楽～歌曲で綴る名曲～
●出演／アンサンブル・ステッラ
歌：隈本由紀子氏 山崎芳智子氏
ピアノ：中村いく子氏 隈本義子氏

◆5月12日（日） 午後1時30分～2時30分
大阪フィルのメンバーによるスペシャル・コンサート
●出演／ヴァイオリン：崔文洙氏 須山暢大氏
ヴィオラ：木下雄介氏
チェロ：近藤浩志氏
●曲目／貴志康一（1909-1937）竹取物語 龍
コダーイ（1882-1967）ヴァイオリンとチェロのための二重奏曲より
ドホナーニ（1877-1960）セレナーデより
バルトーク（1881-1945）ルーマニア民俗舞曲
ヒンデミット（1895-1963）ミニマックス（軍楽隊のためのレパートリー）

◆5月19日（日）、6月9日（日） 午後1時30分～3時
吹田が生んだヴァイオリン奏者
堀江恵太の演奏会
●出演／ヴァイオリン：堀江恵太氏
ピアノ：荒井悦子氏
●曲目／貴志康一（1909-1937）竹取物語 月 龍
イザイ（1858-1931）無伴奏ヴァイオリンソナタ第1番
クライスラー（1875-1962）愛の喜び 愛の悲しみ 美しきロスマリン
パガニーニ（1782-1840）10番 16番 カンタービレ

◆6月2日（日） 午後1時30分～2時15分
貴志康一の生涯と音楽～フルートで綴る名曲～
●出演／フルート：小西幸男氏 乾真理子氏 ピアノ：林典子氏

体験イベント ●申込不要 ●参加費無料 ●観覧料別
●会場／3階特別展示室

◆5月3日（金・祝）、5月4日（土・祝） 午前10時～午後5時
展示室クイズ・ラリー
（吹田市立博物館ボランティア有志の会）

吹田市立博物館だより 第77号 平成31年（2019年）3月31日発行 この冊子は2,500部作成し、1部あたりの単価は25円です。
編集・発行／吹田市立博物館
〒564-0001 吹田市岸部北4丁目10番1号 TEL 06（6338）5500・FAX 06（6338）9886
ホームページ http://www.suita.ed.jp/hak/